

閑谷学校が創学350年を迎えた今年、当センターでは「温故知新」をテーマに掲げ、教育によって豊かな国づくりを進めた創学当時の学びから、現在の問題を克服し未来を切り開く知恵を学ぼうとしている。

庶民が学ぶ郷校（こうがう）の創建を下命したのは池田光政だが、彼に影響を与えた熊沢蕃山の師・中江藤樹は、儒学の四書の一つ『大学』から、不平等な身分秩序の中で人は誰でも学べば平等に聖人になれることを知り、人格を磨いて近江聖人と尊称された。

儒学の学び方には当時、素読（そだく）、講釈（こうしゃく）、会読（かいだく）の3段階があった。閑谷学校でも初学者は素読のみ。次いで講釈を受け、その深まりに従い、会読に参加できた。素読、講釈は教授役からの教えに従うが、会読は生徒が主体的に予習し、生徒同士で侃々諤々（かんかんげつげつ）対話し、読みの

香山 真一

岡山県青少年教育センター
閑谷学校 所長

温故知新

一日一題

正確さや深さを切磋琢磨（せつごく）するものであった。

センターでも、旧閑谷学校の講堂で論語などの四書を学ぶ研修を提供してきたが、素読と講釈が主であった。そこで創学350年を機に、会読を応用した対話式の研修を試みている。

過日、保育士をめざす若者たちの研修で、理想の保育士像について参加者同士の対話が行われたが、「子どもたちに言い過ぎてても言い足りなくても適切でない」「保育を楽しめるようになりたい」などの言葉が出てきて驚いた。その後、学ぶ予定の『論語』の章句そのものだったからだ。

予定調和ではなく、主体的・対話的で深い学びを体験する研修の姿が現れつつある。新学習指導要領の眼目でもあるこうした学びの形は、まさに温故知新のたまものと云ってよい。